



TITLE:

姉妹に観られた内臓転位症

AUTHOR(S):

木村, 昇; 小河, 一夫

CITATION:

木村, 昇 ...[et al]. 姉妹に観られた内臓転位症. 日本外科宝函 1960, 29(3): 854-856

ISSUE DATE:

1960-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207107>

RIGHT:

姉妹に観られた内臓転位症

京都大学医学部外科学教室第2講座（主任：青柳安誠教授）

島根県中央病院外科

木村 昇・小河 一夫

〔原稿受付 昭和34年12月21日〕

SITUS INVERSUS VISCERUM OCCURRING IN TWO SISTERS

by

NOBORU KIMURA and KAZUO KOGAWA

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical
School (Director : Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)
Surgical Clinic of the Shimane Central Hospital

Situs inversus viscerum in two daughters of consanguineous parents is reported here.

A 31-year-old woman suffering from intestinal obstruction was admitted to our clinic on April 4, 1957. Physical and X-ray examination showed dextrocardia, and laparotomy revealed transposition of all abdominal viscerae. Her parents and three sisters were examined and one, aged 21, was found to have transposition of the heart, stomach and liver.

Although the cause of situs inversus is not yet clear, these cases suggest that heredity may play an important role.

緒 言

内臓転位症に関する報告は古くより枚挙にいとまなく、本邦においても昭和27年迄に632例を数え、その後も多くの追加報告がなされている。かかる報告の大部分は、主として本症が稀であるという点、或いは虫垂炎等を併発した場合診断学上興味があるという点から行われているが、家族的に観られた内臓転位症の報告例はまことに少なく、私達が調べた本邦文献例では前川・大島等の僅か8例のみみられるにすぎない。

私達は最近癒着性イレウスの診断によつて開腹した患者において全内臓転位の存在を確認し、またその妹の一人に同症を発見し、かつその両親が従兄妹同志の近親結婚であつた症例を経験したので、本症の発生学上興味深いものと考え、ここに報告する。

症 例

第1例. 31才の家婦（長女）

主訴：左下腹部疼痛

家族歴：両親は健在し、内臓転位を認めない。両親は互に従兄妹の關係にあり、5子を設け、長男は2才で肺炎のため死亡したが、他の3人は健在。外見上いずれにも畸型を認めない。尚両親は各4人兄弟で内臓転位を指摘されたものはないという。

既往歴：生来健康であつたが、約4年前子宮外妊娠破裂で開腹。術後手術創が感染し、その為以後下腹部正中線上に癒痕ヘルニヤを形成した。右利である。

現病歴：3日前突然左下腹部に刺し込むような激痛を来し、鎮痛剤の注射を受け6～7時間は軽快していたが、再び激痛発作を繰返し腹鳴・悪心を伴う。発病

自験例において両親の血族婚姻とその子女5人中2人に本症をみたこととの間には当然密接な相関性があるものと想像され、少なくとも若干の内臓転位症例ではその発生に遺伝的要因の関与していることが推定される。かかる症例は前川氏ものべたごとく、充分な血族調査が行われるならば、より高率に見出されるものと思われ、事実西岡らの調査によると26例中4例の両親に血族結婚がみられたという。

結 語

イレウスで入院手術を行つた患者において全内臓転位を発見し、その両親が従兄妹結婚であること、及び両親、同胞3人を検診して妹の1人に全内臓転位を見出したことをのべ、本症発生上興味ある症例と考えた。

文 献

- 1) 前川照王：右心症知見補遺，殊に遺伝的關係を証明せし症例について。愛知医学会雑誌，**34**，48，1927。
- 2) 大島正徳：家族的に現われた完全内臓錯位症。グレンツゲビート，**3**，1509，1929。
- 3) 森 忠夫：兄弟にみたる内臓錯位症。海軍医学会雑誌，**30**，469，1940。
- 4) 管原長博：兄弟に観られたる完全内臓錯位症例。医学と生物学，255，1946。
- 5) 西岡義雄他：右胸心26例の統計的観察。四国医学会雑誌，**8**，42，1951。
- 6) 三上義樹：内臓逆位とその成因について。新潟医学会雑誌，**66**年，289，1947。
- 7) 川畑徳幸他：外科臨床において経験した全内臓錯位症の2例。日外宝，**25**，324，1951。
- 8) 西村秀雄：環境因子は所謂生れつきを如何に左右し得るか。最新医学，**11**，1，1956。

成人小腸重積症症例

岐阜県立医科大学第1外科学教室（指導：鬼束惇哉教授）

徳 田 稔・松 波 英 一・河 村 雄 一
広 瀬 光 男・佐々木 英

〔原稿受付 昭和35年2月20日〕

INTUSSUSCEPTION OF THE SMALL INTESTINE IN ADULTS; REPORT OF THREE CASES

by

MINORU TOKUDA, EIICHI MATSUNAMI, YUICHI KAWAMURA,
MITSUO HIROSE and EI SASAKI

From the 1st Department of Surgery, Gifu Prefectural Medical School
(Director: Prof. Dr. A. ONITSUKA)

Three cases of intussusception of the small intestine in the adults (16, 67, 56 years of age respectively) caused by tumor were reported and a brief statistical observation was presented.

成人腸重積症は乳幼児のそれに比較して稀であり、且つ本邦では多くは廻盲部或は結腸重積症である。我々は小腸腫瘍により発生した本症の3例を最近相次いで経験したので之を報告する。

症 例

症例1：

16才男子，家族歴既往歴には特記すべきものはな